

誰も教えてくれなかった 皮疹の診かた・考えかた [Web 動画付]

松田 光弘 著

＜書評者＞ 野口 善令（豊田地域医療センター総合診療科・教育顧問）

私は総合診療医ですが、体系的な皮膚科の教育を受けたことのない世代でもあり皮疹の診断は苦手です。

皮疹の診断ができるといいと思いますが、勉強してもなかなかすっきりわかるようになりませんでした。

わからないから苦手意識が募りますが、そうかといって何でも皮膚科医に診てもらわねにもいかない、という困ったジレンマに陥り、すっきりしないがとりあえず外用薬を出しておこうという診療になってしまいがちです。

この理由の1つは、本書にもありますが、皮疹の現れ方は多種多彩なので典型的な皮疹をマスターしてそれを応用して診断するという戦略が取りにくいことにあります。つまり、教科書にある写真との「絵合わせ」では典型的な皮疹以外は診断ができるようにはなりません。

さらに、皮膚科疾患の病名は内科に比べて桁違いに多いのも要因です。診断するためには、分類の基準となる疾患名の命名が必要で

すが、これが皮膚科領域では錯綜しています。

病名付けの軸となる視点が、原因物質、病因、部位、年齢、臨床像（見え方）など多数あるため、疾患名の数が増大になります。同じモノに違う病名が付くことがあります、非専門医にとって混乱の原因になります。

これも本書に書かれていますが、皮膚科医でもわからないものはわからないので（こう言い切ってもらえると安心します）とりあえず病名を付けるためにこうした命名体系になっているのだと思うられます。

これらの理由で非専門医には、システム1を形成して直感的に診断していくには無理があるのです。

さて、そんな苦手な皮疹の診断ですが、この本で勉強すると頭の中に地図ができて大まかな方向性が見えてくるでしょう。本書が提案するのは、判別しやすい皮疹表面の性状に着目して組織学的病変と対比しながら区別していくという比較的シンプルな診断推論の戦略ですが、これをマスターすれば

今までの教科書を読んでもわからなかったことがわかり、なぜわからなかったかも少し理解できるようになると思います。

皮膚科領域の診断推論の地図を与えてくれる本書は、皮疹を診なければならぬ非専門医、プライマリケア医にこそお薦めの教科書です。

最後になりますが、本書では、拙著『誰も教えてくれなかった診断学-患者の言葉から診断仮説をどう作るか』（医学書院、2008）に多大なる賛同をいただきました。この本で診断の思考プロセスを紹介して以降、「診断推論」の概念が臨床医に浸透し、いろいろな分野で発展、応用されているのは非常にうれしいことです。「診断推論」がさらに病に苦しむ人達の助けとなることを願って筆を置きます。

● A5 頁264 2022年1月
 定価：4,400円
 （本体4,000円＋税10%）
 [ISBN978-4-260-04679-4]
 医学書院刊